ワーケーション。海へ、山へ、温泉へ

ワーケーションの類型は、休暇を主体とする「休暇型」と仕事を主体とする「業務型」の二つに大きく分類されます。「業務型」は、さらに「地域課題解決型」、「合宿型」、「サテライトオフィス型」の三つに分類されます（下図参照）。今回のワーケーション特集では、この三つの「業務型」にそれぞれ取り組む県下の自治体やワーケーション施設、企業の事例を紹介します。

休暇型	福利厚生型	リゾート地や観光地等で休暇を楽しみながらテレワークを行うもので、企業が有給休暇の取得促進など、福利厚生を目的に行っている場合が多い
業務型	地域課題解決型	地域の関係者との交流を通じて、地域課題の解決策を共に考えるもので、企業の社会貢献やSDGsへの取組が求められている昨今、注目されている
	合宿型	リゾート地など通常の業務環境とは異なる所で会議や研修等を行うもので、新しいアイデアの創出やチームワークの構築に活用される
	サテライトオフィス型	企業がリゾート地などに設置するサテライトオフィスや一般的なシェアオフィスを利用してテレワークを行うもので、企業間の情報交流に活用される例もある

事例 1　「地域課題解決型」に取り組む自治体　新温泉町（湯村温泉）

■新温泉町版「課題解決型ワーケーション」の始まり

兵庫県の最北西部に位置する新温泉町は、北は日本海、西は鳥取県境に接し、内陸部は1,000メートル級の山々に囲まれています。また、2010年10月に世界ジオパーク加盟が認定された山陰海岸ジオパークの中央部に位置し、今から約1,200年前に慈覚大師により開湯されたと伝えられている湯村温泉をはじめ、浜坂温泉、七釜温泉などの温泉を有しており、『海・山・温泉』を包含する豊かな自然に恵まれた地域です。しかし、近年、少子高齢化が進み、生産年齢人口の減少により、深刻な働き手不足が生じています。このため、同町では、地域課題の解決を共に考え、共に行動していただける企業を求めて、2019年にワーケーションの取組を始めました。

■ワーケーション施設の整備

「荒湯（※）近くの空き店舗に再び灯（あか）りをともしたい」との住民の願いを実現するため、店舗運営を担う人材として地域おこし協力隊員を募り、国の地方創生テレワーク交付金などを活用して、荒湯を見下ろす空き店舗の2階に「Cafe98℃」を2021年4月にオープン。このカフェは、湯村温泉の旅館街に泊まる人が、気軽にテレワークのできるスペースを提供しています。

荒湯を見下ろすCafe98℃

また、市町合併前の温泉町時代にカナダとの交流をきっかけとして、カナダから原木を取り寄せて建設した「ログハウス・カナダ」をリニューアル。6棟あるログハウス（宿泊定員最大42人）には、寝室、リビング、キッチン等を備え、お風呂には、湯村温泉のお湯を引くという力の入れよう。大自然の中での長期のワーケーションにぴったりの施設です。

※「荒湯」は湯村温泉の源泉で、98℃の熱湯が湧出しています

■ワーケーションモニターツアーの開催

2020年、兵庫県の協力を得て、東京圏からさまざまなスキルを持つワーカーを招き、地域の豊かな自然や農水産物等を体験してもらうツアーを開催。結果、郷土食のECサイトの構築やワカメの加工品の開発などに結び付きました。

ログハウス・カナダの内部

新温泉町のワーケーション事業を立ち上げ時から担当する商工観光課課長の福井崇弘さんは、「地域課題の解決のために、共に考え、共に行動していただける企業を求めています。新温泉町の豊かな自然と農水産物等を活用した事業などに一緒に取り組んでみませんか」と呼びかけています。

問い合わせ先／新温泉町商工観光課 TEL 0796-82-5625

事例 2　「合宿型」に取り組む施設　アグリミュージアムNADA（南あわじ市）

■廃校を活用した絶好のロケーション

アグリミュージアムNADAは、淡路島の最南端にある廃校になった南あわじ市立灘小学校をリノベーションしたものです。廃材となった淡路瓦を外構工事やインテリアに応用するなど、環境再生事業を主業とする株式会社エコリカルが運営しています。「教室の前に広がる海と沼島が一望できるこの景色にほれ込みました」と語る代表取締役の菊川健一さん。地元淡路の地域振興、観光振興に役立てればと、廃校となった校舎の整備を決断したそうです。

まず、2016年に温室を校庭に建設し、トマト栽培を手がけることから始め、2019年に教室を宿泊施設（定員30人）に改修。その後、キッチン、コワーキングスペース等に順次改修し、校舎屋上にはキャンプサイトも整備。「農業・美食・体験」をテーマに、交流や研修の場として活用されています。

旧校門に立つ菊川さん

■さまざまな体験メニューの提供

同施設では、校舎・校庭での体験のほか、南に広がる海での釣り体験やSUP体験、北にそびえる諭鶴羽山でのトレッキング体験など、18の体験メニューを用意。国生み伝説が残る沼島の探索や近隣施設をサイクリングで訪問するなど、活動内容は広範囲に及んでいます。「新しい体験は、きっと新しいアイデアを生み出します。チームビルディングの研修にもうってつけ。現在も大阪や県内の企業から研修の予約が入っています」と菊川さん。ワーケーション拠点としてますます活用が期待されています。

絶景のコワーキングスペース

体験・宿泊予約／アグリミュージアムNADA
TEL070-9012-1349

事例 3　「サテライトオフィス型」に取り組む企業　株式会社阪技（高砂市）　2018年度表彰企業

■IT企業に力を注ぐ沖縄に進出

1981年に創業し、高砂を拠点に原動機やプラントの設計、システム開発などを行う同社。「企業の成長には人の育成が不可欠で、そのためには時には環境を変えて社外の人と交流し、見聞を広めることが必要」という考えの下、2019年、那覇市にサテライトオフィスを開設。沖縄本島や宮古島に設けられた6カ所のコワーキングスペースを使える環境を整備しています。

代表取締役社長の後藤純次さんは、「沖縄はIT産業に関心が高いことから台湾やベトナムといったアジアの国々から優秀な起業家が集まっており、さまざまな人的交流により刺激を受けることができます」と魅力を語ります。

ところが、1年もたたないうちにコロナ禍に。それまでは後藤さんと数人の社員が月に一度、2泊3日程度で数回利用し、コワーキングスペースで異業種の人と多くの情報を交換して実りの多い時間が過ごせたといいます。

異業種の人材と交流できる
コワーキングスペース

■柔軟な働き方と幅広い活用を検討

また、「せっかく沖縄に行ったからには、仕事を早めに切り上げ、リフレッシュできるように」と、現在、月単位の変形労働時間制の導入に向けて準備を進めています。「デザイン業務や採用の担当者は、オフの時間がきっかけとなって新しいアイデアが生まれたそうで、これもワーケーションのメリットの一つだと感じています」と後藤さん。

「時には働く環境を変える
ことが重要」と後藤さん

今後サテライトオフィスを利用できる業務領域を拡張し、より多様な社員がグループ活動の一環や社員研修、社員旅行として活用することで、社内外から刺激を受け、イノベーションオフィスへと展開できるよう取り組んでいます。

宿泊費や交通費については、働く環境や人への投資の観点から、会社が負担するのを前提に長期的な費用対効果を見込める形を構想しています。「継続しないと成果は出ないので、会社にとっても社員にとっても無理のない形を探りたい」と、後藤さんは話されています。